

市民文芸

短歌

令和五年度
阿南市春季短歌誌上大会 選

入選

柿の木は真つ裸なりそのかたき幹にはひそと芽
をかくし持つ 井上 正恵

このごろはマラソンコースを徒歩で行く なつ
かしきかな少女の私 延原 茂子

春耕に大地と空をつなぐ人へ背伸び背かがみ
吐息の聴こゆ 手塚都樹子

真夏にはしたたかだったへ泡立草へポキポキ折
れて空を譲りぬ 中山 善嗣

新しき制服部屋に吊し寝る少女の夢のなか覗き
たし 木内 照代

まひの妹に植えし桜は満開に生きてありせば共
に愛でしも 庄野 悦子

寝顔など気にせずならず来し日日よ臥す夫にみ
る額の年輪 西條 悦子

米作り夫がいなけりや作られぬ喧嘩しつつも田
作り励む 高尾 久枝

裏庭にれんげ草の花咲きぬ遊山箱出し節句待ち
おり 京寛 幸美

曾孫は掴まり立ちに挑戦すかわいい笑顔はバア
バの宝 青木 弘子

六畳の四隅に残りし吊し金具思い出残し時代は
変わる 福崎 由美

俳句

阿南市俳句連合会 選

阿波踊山河はじけて皆阿呆 神原 鹿山

行く秋や区切り区切りにすすむ過疎 東條 明宏

吾が庭のくさぐさ長き良夜かな 片山 幸美

母の忌に帰る残暑の田舎バス 喜来富士子

校庭に広がる声や初紅葉 前原 真理

はてしなく空は深く赤とんぼ 水口 明美

今日退院園の木陰におどり見て 工藤千鶴子

時化もやふ風のまにまに法師蟬 田中 栄子

枝豆や下戸の指先よく動く 宮繁ただし

旅ごころつるの色なき風立てば 岡久 玲子

川柳

阿南川柳会 選

アレしなきや呑気な僕は今日もせず
起きたけど寝るまで特に用もなし 近藤 大地

まさかとも思う言葉にだまされる
サバ読んでみても尻尾が出ています 神野 鈴代

好物の肉へ近ごろ歯がごねる
白い雲我が退屈の友となる 二階千代美

母と子の隙間を埋めたのは絆
持木 寿栄

野村 敏子

高木 旬笑

渡邊 浪漫

一般応募

松茸とサンマ横目に見る高値 島尾美津子

テロップへ目が釘付けになるテレビ 武田 敏子

死んでお詫び出来ないせめて家閉じる 藤田ひとみ

漢詩

阿南漢詩研究会・青松吟社 選

秋郊即事 市田 嘉則

霜楓如錦映斜陽 霜楓の如く斜陽に映じ

野菊芬芬吐古香 野菊 芬芬 古香を吐く

隨處西郊好詩料 隨処の西郊 好詩料

咏將秋景滿吟囊 秋景を咏じ將つて 吟囊を満たす

秋夜讀書 高橋 静雄

獨坐草堂涼透肌 独り草堂に坐し 涼肌に透る

月光映水繪秋時 月光水に映じ 秋を絵くの時

凡人最愛讀書候 凡人最も愛す 讀書の候

一穗青燈一卷詩 一穗の青灯 一卷の詩

述懐

空庭寂寂夜沈沈 空庭 寂寂たり 夜沈沈

暗澹寒窗月影侵 暗澹たる寒窓 月影侵す

浴盡清光詩未就 清光を浴し尽くすも 詩未だ就らず

非才無奈坐更深 非才 奈ともする無く 更深に坐す

折野 博子

